Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-21

児童期・青年期における居場所に関する一考察 : 居場所感の視点から

西中, 華子

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,8(1):151-164

(Issue Date)
2014-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81008567

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008567

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 第8巻 第1号 2014
Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Vol.8 No.1 2014
研究報告

児童期・青年期における居場所に関する一考察
―居場所感の視点から―

A consideration of “Ibasho” in Childhood and Adolescent
A Review on Research and Task in “Ibasho” and consider from the points of the sense of “Ibasho”

西　中　華　子*

Hanako NISHINAKA*

要約：本研究は居場所に関する先行研究を居場所感の見地から概観し，今後の課題について考察したものである。まず本研究では，個人が「居場所がある」という感覚を規定する感情である「居場所感」を感じられる，物理的空間や対人関係，時間や状況を含む「場」を居場所と捉えた。そのような視座に立ち，居場所に関する研究を概観した結果，1）「個人が重視する居場所感の要素」により居場所を分類し，それぞれの効果について実証的に明らかにすること，2）居場所を「居場所がない」という体験の側面から操作的に定義し，居場所感の実態について明らかにすること，3）居場所感の要素を不足なく含む項目を用いて居場所の実態を明らかにすること，4）「居場所がない」という感覚の実態について明らかにすること，という4つの課題が挙げられた。また，教育の分野では小学生を対象にした居場所の議論が多くなされているにも関わらず，心理学における実証的研究が乏しいことも明らかとなった。それに伴い，5）児童期の居場所感の実態をより詳細に研究する必要性および，児童期の適応を規定する要因について，居場所感および「勤勉性（industry）」の観点から検討する必要性がさらに課題として見出された。

キーワード：居場所感　適応　勤勉性（industry）　児童期　青年期

1．居場所概念に関する研究の現状とその問題点

近年，居場所という言葉をさまざまなところで目にするようになっており，広く一般的な用語として認知されつつあることがわかる。この居場所という言葉は「居場所がない」という文脈の中で用いられていることが多いが，これは辞書的な意味である物理的な「いるところ」（例えば家や部屋など）がない，という意味で使われているのではない。このように「居場所」という言葉は，一般的にも心理的な意味をもつ用語として捉えられるようになってきていることがわかる。

心理学や教育の分野においても居場所についての議論が多くなされるようになっており，その適応的な効果が期待されている。そのような中で居場所の概念について十分な共通理解がされていないことが課題として指摘され，居場所の概念に関する実証的研究が蓄積されている。居場所の概念に関する研究としてはまず，居場所の実態を自由記述の質問紙を用いて明らかにしようとしているもの（白井，1998；杉本・庄司，2006a；堤，2002；山岡，2002；弓削・足立，2006など）が挙げられる。これらの研究では居場所として家や自分の部屋といった物理的な場所や，家族や友人といった対人関係と考えられるものが混在して挙げられている。これらは居場所としてイメージされやすい具体的な場を調査することにより，居場所となるための条件や性質について明らかにしようと試みられた研究である。しかし，その「場」が「居場所」となるか否かは個人の主観にゆだねられるとの指摘（萩原，1997）から，居場所として想起される場所や対人関係といった「居場所環境」（杉本・庄司，2006a）や居場所の「客観的条件」（住田，2003）には，一定の共通した傾向はあったとしても，それだけでは，居場所という概念の実態を十分に捉えられないことが危惧される。

このことから，居場所の実態を個人の主観という側面から研究しているものも増加してきている。その中で，尺度を用いた研究を行っている主なものとしては居場所となるために必要な感情である居場所感の構造を分析したもの（秦，2000；石本，2010a；則定，2008；大久保，2005など），居場所の心理的機能の構造を分析したもの（杉本・庄司，2006a），居場所の特徴を検討したもの（田中・田嶌，2004）が挙げられる。このようなアプローチによる実証的研究の蓄積により，居場所を構成する概念について一定の理

*　神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

（2014年4月1日　受付
2014年5月26日　受理）

解が得られつつある。一方でこれらの研究では研究者によって居場所の定義や教示の仕方が異なっており，それぞれが異なる立場をとっている点が問題といえる。

「居場所」という言葉には「場所」という文字が含まれることから，家や部屋といった物理的な場所が連想されることが多くなる。しかし上述した「居場所がない」の意味が家や部屋がないことを表しているのではないことからも，居場所として想起される物理的な場所の欠乏が，「居場所がない」という状態ではないことは明らかであり，居場所概念における居場所とは物理的な場所ではないと考えられる。また居場所を対人関係に限定して捉えている研究もみられるが（石本，2010；則定，2008など），「自分の部屋」といったプライベートな要素を含むイメージが居場所として想起されることがあることからも，居場所は必ずしも同一空間内にいる他者に生じるものではないことが予想される。以上のことから次節ではまず，どのようなアプローチ方法を用い，個人の主観としての居場所を捉える必要があるのかについて考察していく。

2．適応の指標として居場所感を捉えることの意義

1）居場所の捉え方と分類

居場所とは単なる物理的な場所ではなく心理的な意味を含んだ概念であること，および居場所の実態を捉えるためには，居場所を個人の主観という面から捉える必要があることを前節で論じた。村瀬・重松・平田・高堂・青山・小林・伊藤（2000）は，居場所を「心の拠り所となる物理的空間や対人関係，もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファー」と定義しているが，本研究ではこれを参考に，個人の主観であり，「居場所となるために必要となる感情」（石本，2009a）である居場所感を感じられる，物理的空間や対人関係，時間や状況を含む「場」を居場所と捉えることとする。以下では先行研究を概観し，本研究における居場所感の捉え方について立場を明確にする。

居場所の定義に関する提言・論考

まず居場所の定義に関する提言および論考を概観した。居場所問題の発端である教育の分野では，居場所を「児童生徒が存在感を実感することができ，精神的に安心していることのできる場所」（文部省，1992）や「子ども一人ひとりの個性が大切にされ，自分の能力が十分発揮でき，『自己存在感』が得られるような，子どもが精神的に安心できる場所」（沖田，1997）と定義している。ここでは居場所感として具体的な感覚が挙げられているわけではないが，他者から個人として大切にされているという実感，能力を発揮できているという実感，安心できる実感が居場所感であると理解できる。さらに臨床教育学の分野では，居場所を「子どもにとって自分の気持ちを理解してくれる人と必ず出会えるところ」，「自分の気持ちを素直に表現してもそれが否定されないところ」，「自分の意見が尊重され自分の役割が実感できるために自己肯定感が取り戻せるところ」であるとしている（廣木，2005）。このことから臨床教育学の分野では居場所感を，自分の気持ちを理解，尊重してくれ，ありのままを表現できる関係性の実感や，それに伴う自己肯定感や役割の実感と捉えているといえる。一方居場所に関する心理学的考察では，「自分が自分でいるための環境」（北山，1993）や「自分のありのままを受け入れてくれるところ，居心地のよいところ，そこにいるとホッと安心して居られるところ」（住田，2003）と定義しているものがみられる。ここでも居場所感を，ありのままを受け入れてもらえる関係性の実感とそれに伴う安心感や居心地の良さの感覚，と捉えている。このように，教育学，臨床教育学，心理学の分野の提言・論考では，他者との関係性を前提としている居場所感が多くみられる。また教育学の分野では，他者との関係性如何とは離れてさらに，自分の能力の発揮，といったコンピテンスに関わる実感を居場所感の要素として挙げている。以上の定義では，居場所感の各要素が主観的に感じられる場所や対人関係を居場所としていると推定できる。

居場所の分類に関する研究

さらに居場所には種類があるとし，居場所の分類を試みているものもみられる。藤竹（2000）は居場所を「自分が他人によって必要とされ」，「自分の資質や能力を社会的に発揮することができ」，集団における「自分のポジションを明確にできる」居場所である「社会的居場所」と，「安らぎを覚えたり，ほっとすることができ」，「人間が自分自身であることを実感できる」居場所である「人間的居場所」とに大別している。加えて，持続的な安定感を得るためには「この場所こそは自分をまるごと受け入れてくれると自信をもって言うことのできる」「永続的居場所」として，これらの居場所を認知する必要があると論じている。つまり「社会的居場所」で得られる居場所感とは，自分の能力が認められ，必要とされる関係性の実感，「人間的居場所」で得られる居場所感とは，安心できる感覚や，ありのままの自分でいられる感覚であると理解できる。さらにどちらの居場所も，いつでも自分のありのままを受け入れてくれる関係性の実感が得られる場合に，真の居場所である「永続的居場所」として規定されることが推定される。同様に安齋（2003）も居場所を，「居られない場から逃げ出し立ち止まって心の安定を図る場」である「後ろ向きな居場所」と「自分の自己像を修正し自立していく場としての『居場所』であり，その先にはいきいきと自己発揮することが予測されている」居場所である「前向きな居場所」に分類している。ここでも先に挙げた提言同様に，コンピテンスに関わる実感のほかに，他者との関係性を前提としている居場所感が多くみられる。さらに関係性が居場所の基底的要素であるという指摘（東，1999；住田，2004など）があることからも，他者との関係性の認知により生じる感情が，居場所感の重要な一要素として挙げられることが推定される。さらに藤竹（2000），安齋（2003）に類似の分類として，「他人からの監視・干渉を避け，精神的な疲れを回復し，自分を取り戻す」「逃避・回復の場所」である「私的居場所」と，「自分を確認し，自由に自分を表現でき」，「安心して人や社会との関係性をもてる場所」である「公的居場所」を挙げた中島（2003）や，「一人になって自分を取り戻せる場所」である「個人的居場所」と「人と関わりをもち自分を確認できる場所」である「社会的居場所」を挙げた中島・倉田（2004）がみられる。居場所研究における展望論文では，これらと先述の藤竹（2000）や安齋（2003）の分類を同様のものとして扱い，他者の有無による分類であると考察しているものが多い（石本，2009a；杉本・庄司，2007など）。しかし藤竹（2000）は，

「人間的居場所」の規定要因に自分以外の人間がいるかいないかは関係がないとしており，１人でいる居場所や「愛する配偶者」という「“他人”ではない」者と一緒にいる居場所がここに含まれるとしている。つまり藤竹（2000）は居場所を単純に他者の有無により分類しているのではなく，他者との関係性を含めたその「場」を，個人がどのように認知しているかにより分類していると考えられる。例えば１人でいても誰かといても，安心できる感覚やありのままの自分でいられる感覚が安定的に享受できていれば，その「場」は「人間的居場所」であるし，反対に１人でいても誰かといてもそのような感覚を感じられないのであれば，そこは居場所ではない。よって中島（2003）や中島・倉田（2004）の理論と，藤竹（2000）や安齋（2003）の理論は異なるものであると推定される。前者は単純な他者の有無による分類であるのに対し，後者はその「場」に対する個人の認知による分類，すなわち，その「場」で個人が主観的に重要視する居場所感の要素による分類であると考えられる。

他方居場所の分類を「主観的条件」と「客観的条件」という２つの観点から試みているもの（住田，2003）もみられる。ここでは居場所が形成されるためには３つの条件が必要であるとされ，①物理的な空間，②その空間における他者との関係性，③その関係性に対する個人の認知が挙げられている。そして①および②を「客観的条件」③を「主観的条件」とし，「主観的条件」が居場所となるかどうかの第一条件であるとしている。さらに「客観的条件」にはその空間に他者がいるかどうかという「空間性」と，自分を受け入れてくれる他者がいるかどうかという「関係性」の２軸が存在するとし，それぞれの軸の対極を社会的―個人的として，居場所をⅠ～Ⅳ型の４つに分類している。この分類によると，Ⅰ型は家族，学校といった，他者の存在する空間において，自分を受け入れてくれる関係性が存在する居場所であり，住田（2004）はこの居場所がいわゆる望ましい居場所であると位置づけている。Ⅱ型は受け入れてくれる他者の存在する個人的な空間であり，例えば仲間と自室にこもって遊ぶといった，居場所感を感じられる他者との緊密で閉鎖的な居場所といえる。Ⅲ型は他者の存在しない個人的な空間であり，１人で自室にいる状態などであるとしている。Ⅳ型は，他者は周囲に存在するが親密な仲間を持つことができていない状態で，ゲームセンターなどに入り浸っている者を指すとされている。以上から，ここでいわれている「主観的条件」が居場所感に相当すると考えられるが，この分類では「主観的条件」と，「客観的条件」における②他者との関係性との差異が明確でない。②他者との関係性は，受け入れてくれる他者との関係性の有無による分類とされているが，ここでいう「受け入れてくれる関係性があるかどうか」は結局のところ「『受け入れられている』という個人の認知があるかどうか」により規定されており，「客観的条件」とは言い難い。また，Ⅳ型の居場所に居る者については「学校にも地域にも親密な仲間はおらず，だからといって自分の部屋はなく，そのためにゲームセンターなどに行って自分と同質的な人間のなかに身を置くことによって束の間の解放感や安定感を」享受している状態であるとされている（住田，2004）。しかしこの状態を主観的に「居場所がある」と感じているとは想像し難い。そのため，「主観的条件」が居場所となるための条件である，という主張と矛盾しており，Ⅳ型の居場所はそもそも居場所ではないことになる。さらに住田（2004）は他者の存在しないⅢ型の居場所に関して，Ⅲ型の居場所のみを居場所としている場合を「自分の部屋しか居場所がない」という状態だとし，Ⅲ型とⅠ型といったように複数の居場所をもっている場合を「自分の部屋も居場所である」という状態だと判断している。居場所感を感じられる「場」を居場所とするならば，この「自分の部屋しか居場所がない」という状態は居場所感を享受している状態ではないと考えられ，主観的には「居場所がない」状態であることが予想される。また，たとえⅢ型の居場所である「自分の部屋に１人で居る状態」のみを居場所としていたとしても，「自分の部屋しか居場所の選択肢がないため甘んじてそこに居る」状態なのか，あえて今はⅢ型を居場所として選択している」状態なのかでは意味合いが異なるが，住田（2004）のいう「複数の居場所をもっているかどうか」という基準ではこれらを判別することはできない。なぜならⅢ型の状況にのみ身を置いていても，他者のいるⅠ型の居場所に身を置いていても，「居場所がない」と感じるかその状況を楽しみ，居場所感を感じているかどうかは，個人の主観に委ねられるからである。つまり，１人の状況のみを居場所としていること自体が「居場所がない」状態に直結するとは限らないのである。

この住田（2003）に類似する分類として，居場所を「個人の意識」（自己評価）と「他者の目から見たという意味での社会的な位置づけ」（社会性）を軸に，それぞれのズレという視点から居場所を分類している三本松（2000）が挙げられる。ここで論じられている「自分の中の居場所」も，１人の環境だが，三本松（2000）は，たとえ自分１人の環境だからといって必ずしも孤独ではないとしており，この場を主体的に選択して居場所としている場合，孤独を楽しんでいる可能性もあると論じている。一方ここにおける「他者からみた居場所」とは，他者からはその人にとって相応しい場であるとの評価を受けているが，当の本人は居場所感を感じられていない場である。ここではこの場も居場所のひとつとして挙げているが，本研究のように居場所を「居場所感」が感じられる「場」と捉えるならば，この場は居場所ではないことになる。小沢（2000）も「自分の知らない自分の居場所というものは，決してない」と主張しており，この場を居場所と捉えることには懸念がある。さらに４つ目の「孤立した状況」は「社会的認知も得られず」自分自身も居場所であると感じられていない場のことであり，この場は文字通り居場所ではない。この分類においても個人の主観に，「他者の視点」という客観的な視点が加えられているが，上述したように「他者からみた居場所」や「孤立した状況」といった場は，個人が居場所感を享受できておらず，結局のところ居場所ではないと推定される。

このような他者の有無による居場所の分類はこれまでの居場所研究において一般的であり，１人でいる居場所に関しては実証的研究においても検討されている。石本（2010b）は居場所を他者の有無により「個人的居場所」と「社会的居場所」に分類し，精神的健康および本来感，自己有用感との関連を分析している。これによると，「個人的居場所」は精神的健康および本来感，自己有用感とは関連せず，「社会的居場所」のみの関連が示されている[1)]。しかしながら自己有用感尺度，本来感尺度の項目を概観すると他

者との関係を想定した項目がみられるため，このことが結果に影響を及ぼしている可能性が推測される。また「個人的居場所」と精神的健康との関連を検討する際には，「個人的居場所」をもっていることだけではなく，個人が現在「個人的居場所」を希求しているかどうか（欲求が充足されているか否か）という点を考慮する必要があると予想される。なぜなら上述したように，他者の有無によって居場所を分類するのなら，甘んじて「個人的居場所」を居場所としているのか，自ら「個人的居場所」を選択しているのかという点で，個人の感情は大きく異なることが推定できるからである。

以上のことから，居場所とは一義的なものではなく，いくつかの種類が存在することが推定された。本研究では居場所とは個人が「居場所感」を享受できる「場」であると捉えている。そのため，居場所の分類を行う上で三本松（2000）の「他者の目から見たという意味での社会的な位置づけ」（社会性）や住田（2003）の「客観的条件」における空間性という視点は取り入れず，藤竹（2000）や安齋（2003）の立場による，その居場所を個人がどのように意味づけているかという視座に立ち，「個人が重視する居場所感の要素」という視点から居場所を分類する必要性を仮定する。なお居場所の基底的要素として関係性があるという主張（東，1999；住田，2004など）に関しては支持する立場をとるが，それがすなわち居場所における他者の有無を指しているとは考えない。

2）居場所感の構成要素に関する研究

居場所とは個人が主観的に居場所感を感じられる場であると捉えること，および居場所感の実態を捉えることの必要性について，以上で論じてきた。そこでここでは居場所感に関連する知見を得ている研究を概観し，居場所感の要素としてどのようなものが見出されているのかをまとめる。さらにそれらの研究における居場所感の捉え方についても考察し，課題についても言及する。

居場所の臨床研究の概観

まず心理臨床やスクールカウンセリングにおける事例を，居場所の観点から解釈している，居場所の臨床研究について概観する。廣井（2000）は，「居場所がある」状態を「自分自身でいることが受け入れられていると感じられること」であると定義し，青年期男性の非行事例を「居場所のなさ」という視点から解釈している。中原（2002）は，「主観的体験としての居場所感を想定し『自分がそこにいても良い場であり，自分らしくいられる場であり，自分がありのままにそこにいてもいいと認知し得る感覚』」と定義し，受信が遅延した癌患者の心理社会的背景を，家族に対する居場所感の観点から検討している。また居場所感については定義されていないが，前記した村瀬ら（2000）は居場所を「心の拠り所となる物理的空間や対人関係，もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファー」と定義し，通所型中間施設に通う「思春期・青年期の人が育ち直り，社会へと巣立っていく」過程を考察している。ここではありのままでいられる感覚と安心していられる感覚が居場所感と理解できる。これらは居場所問題の発端である「居場所がない」感覚を強く抱いている人たちに寄り添った，問題の核心に最も近い視点からなされた研究といえる。そのためここで得られた知見は居場所研究に重要な示唆を与えるものであるが，実証的研究ではないためエビデンスに乏しいという問題がある。

居場所の実証的研究の概観

次に居場所の構成要素に関して尺度を用いて検討し，居場所感に関する示唆を得ている実証的研究について概観する。ここでは先述した秦（2000），石本（2010a），則定（2008），大久保（2005a）[2)]，斎藤（2007），杉本・庄司，（2006a），堤（2002），に加え，松田（1997），田中（2002），田中・田嶌（2004），富永・北山（2003），の論文を取り上げる。これらの中には大学紀要や学会発表論文集に収録されている論文も含まれており，尺度作成に関する研究として不十分と考えられる点を含むものも見受けられるが，居場所感に関する知見を広く得るために必要と考えられたため，考察の対象とした。居場所の構成要素に関する尺度は，①対人関係の視点から居場所を分類して教示する方法，②居場所を操作的に定義して教示する方法，③「居場所がない」や「居場所がある」感覚に関する項目を収集し，それらの感覚をどのぐらい感じているのかを問う方法，の3つの教示方法がみられた。

①対人関係の視点から居場所を分類して教示しているものとして，以下のようなものが挙げられる。則定（2008）は青年期を対象に調査を行い，母親，父親，親友に対する心理的居場所感を測定する尺度を，「本来感」，「役割感」，「被受容感」，「安心感」の4因子から構成している。ここでは「○○と一緒にいると，ホッとする」といったような対人関係における居場所感を測定する項目が用いられており，居場所を対人関係に限定して捉えている。石本（2010a）も同様のアプローチによる居場所感尺度を構成し，「本来感」および「自己有用感」の2因子を抽出している。居場所感の構造について検討したものではないが，杉本・庄司（2006a）も，一番と自己認知する居場所を「自分ひとりの居場所」，「家族のいる居場所」，「家族以外の人がいる居場所」の中から選択させ，居場所の心理的機能に関する尺度項目について質問し，その構造について検討している。その結果「被受容感」，「精神的安定」，「行動の自由」，「思考・内省」，「自己肯定感」，「他者からの自由」の6因子が抽出されている。一方，秦（2000）は高校生を対象に調査を行い，家族場面および学校場面における居場所感尺度を，それぞれ，「安心感」，「受容感」，「役割感」の3因子から構成している。富永・北山（2003）も同様に，家庭場面，友人場面，クラス場面における居場所感を問い，「安心感」，「受容的環境」，「連帯感」，「役割」の4因子を抽出している[3)]。さらに斎藤（2007）も「家庭・学校・地域社会の中で」質問項目の感情をどのぐらい感じるかについて質問し，「肯定的心理状態」と「価値観の共有」の2因子からなる居場所感尺度を構成している。また松田（1997）は心理的居場所の内容に関する項目を収集し，自分の部屋，自宅の居間，自分の教室，クラブの部屋の4場面について高校生を対象に調査を実施し，「リラックス」，「ハッスル」，「プライベート」の3因子を見出している。これらでは居場所を家庭（家族），学校，地域のような場面に限定して尋ねており，質問の方法はやや異なるが則定（2008）や石本（2010），杉本・庄司（2006a）と類似のものと考えられる。このように居場所感について検討した実証的

研究では，居場所を対人関係の視点から分類して分析しているものが多い。上述してきたように，居場所感の要素として対人関係の認知により生じる感情が考察されていることから，ここで挙げられている感情は居場所感の構成要素として重要なものと考えられる。しかしながらこれらの教示では，研究者が提示した場所や対人関係に居場所をもっていない者の居場所感を捉え逃してしまうことが懸念される。場所や対人関係といった居場所の具体的な状況は人それぞれであると考えられることから，研究者の側が具体的な状況や対人関係を提示するには限界があり，この点で方法論的な課題が残されているといえる。

それぞれの研究において作成された尺度の項目を概観した結果，ここでは居場所感の要素として，他者から受け入れられている感覚を表す「被受容感（他者からの受容）」，ほっと安心できる感覚である「緊張からの解放（安心感）」，ありのままの自分でいられる感覚を表す「本来感」，自己の存在意義を肯定的に捉えている感覚である「自己存在感（自己肯定感）」，自分が他者の役に立っているという実感である「自己有用感」，自分の能力の発揮できる実感や生き生きした感覚である「充実感（達成感）」，他者と共通の目標をもっている一体感を表す「連帯感」，楽しいといったポジティブな感情を表す「高揚感」，周囲になじめている感覚である「場との一致感」，自分について振り返る「内省」，誰にも邪魔されず自分の自由に振舞えている実感である「自由の確保」，が見出された。

さらに②居場所を操作的に定義して教示し，居場所の構成概念を検討しているものもみられる。田中・田嶌（2004）は，「休み時間や放課後に自然と足の向く場所」の有無を尋ね，あると答えた者にはそこでの感情について，ないと答えた者には教室での感情について質問し，１因子構造の居場所感尺度を構成している。さらにそこにいるときの様子を思い浮かべ，居場所の特徴を測定する尺度を，個人要素と場所要素に分けて構成している。しかし「休み時間や放課後に自然と足の向く場所」がない者が教室を居場所としているとは限らないのに，そこでの感情を尋ね，それを居場所感尺度の項目として採用している点や，居場所感尺度と居場所の特徴を測定する尺度が共に主観を測定しているのに，これらを分けて分類する意義が明確でない点などから，研究方法に重大な問題が認められる。操作的定義の内容についても吟味も重ねる必要があると考えられる。また田中（2002）は，「自分が自分らしくいることができるなあ」と思うときの具体的な場所や場面を想起させ，その場面において質問項目の感情をどれぐらい感じるのか尋ねる方法で，「居場所」感情尺度を作成し，「安堵感」，「充実感」，「否定的感情」の３因子が見出されている。ここで作成されている尺度は，居場所において感じる感情を測定する「居場所」感情尺度であり，これは居場所となるために必要な感情である「居場所感」を測定する居場所感尺度とは厳密には異なる概念を測定している。しかし居場所となるために必要な感情[4)]と，居場所において感じる感情は重複する要素があると考えられるため，考察の対象とする。またここで見出された「否定的感情」は，「居場所感」には含まれないと考えられるが，居場所で感じられる感情として，重要な要素であると考えられる。居場所という言葉が一般に広く認知され，人によって様々な捉え方がされるようになっていることから，このように居場所を操作的に定義してその構成概念を捉えるアプローチは必要であると考えられる。しかしながら上述したように居場所を操作的に定義し，居場所感の実態を明らかにした研究では，方法論に重大な問題が残されている。

これらで作成された尺度の項目を概観すると，居場所感の要素として，「被受容感（他者からの受容）」，「緊張からの解放（安心感）」「本来感」，「自己有用感」，「充実感（達成感）」，「連帯感」，「高揚感」，「自由の確保」，「場との一致感」，が見出された。

このように上記の実証的研究では，居場所を捉え教示する方法に課題が残されている。そこでここでは居場所の操作的定義と教示の方法について考察する。そもそも居場所という言葉が頻繁に使われるようになったのは1980年代後半の不登校の増加が発端であり，学校に「居場所がない」子どもたちのための居場所づくりがいわれるようになったことにある（住田，2003）。つまり居場所の問題は，子どもたちの「居場所がない」という声から議論され始めた，主観的な不適応感覚に関する問題であるといえる。また北山（1993）は，「居場所とは，いつも失われてはじめて『ありがたさ』が分かるという類のものなのである」と論じており，「居場所がある」状況では居場所の存在は意識されず，「居場所がない」という状況に陥って初めて意識されるものであるという，居場所が個人に実感される状況の特殊な性質について指摘している。同様に萩原（1997）も，「『居場所』とは何かという定義は」居場所喪失経験者の「居場所喪失経験から照らし出されてくる」と主張している。このような指摘は安齋（2003）においてもなされており，以上から居場所感は，「居場所がない」という体験と切り離しては捉えられないことが予想される。よって居場所を「居場所がない」という体験の側面から操作的に定義し，居場所感の実態について明らかにする必要があると考えられる。

他方，③「居場所がない」や「居場所がある」感覚に関する項目を収集し，それらの感覚を現在どのぐらい感じているのかを尋ねる方法で尺度を作成している研究として，堤（2002）や大久保（2005）が挙げられる。堤（2002）は，「居場所がない」感覚に関する尺度項目を準備し，それらの項目をどのぐらいの頻度で感じるのかを尋ね，「居場所がない」感覚尺度を構成している。ここでは分析の結果「対他的疎外感」と「対自的疎外感」の２因子が見出されている。ここで示されている項目内容は，居場所の構成概念を捉える上で重要な知見であると考えられるが，一方で項目を概観すると２つの因子における項目内容の差は明確でなく，因子名も的確とは言い切れないものであるため，因子構造の再検討が必要と考えられる。大久保（2005）は学校環境への適応感を測定するために，「居場所がある」感覚に関する項目を準備し，学校環境においてどの程度項目の感情を感じていのるかを尋ねている。その結果，「居心地の良さの感覚」，「課題・目的の存在」，「被信頼・受容感」，「劣等感のなさ」の４因子が抽出されている。大久保（2005）は個人と環境がうまく適合している状態を適応と捉えており，この尺度は個人と環境の適合度合いに関する個人の認知である，適応感を測定する尺度であるとされている。しかしここでは尺度作成の際，個人が「居場所がある」と認知するときに生じる感情を調査対象としており，これは本研究において居場所感と捉えている概念である。そのため大久保（2005）の研究は，居

場所研究にも多大な示唆を与えるものと考える。

また堤（2002），大久保（2005a）においては，居場所感の要素として先述してきたものに加え，自分の成長に関わる感覚である「成長感」が見出されている。

居場所感に関する実証的研究では，居場所の捉え方や教示の面で課題が残されており，「居場所がない」という体験の視点からアプローチした居場所感研究の必要性を先に論じたが，ここではもう１つのアプローチ方法を検討する。先行研究を概観した結果，居場所の定義や教示方法は未だ様々であるが，居場所感の要素として共通のものがみられることが明らかになった。このことはこれまでの居場所研究における大きな成果といえる。堤（2002）や大久保（2005a）に倣い，居場所感を現在どの程度感じているのかという視点から「居場所がある」状態を捉えるアプローチを用い，これまで挙げてきたような居場所感の要素を網羅する項目を準備し，調査することで，居場所感を包括的に測定することができると考えられる。また，どのような居場所感の要素が適応につながるのかを検討することで，援助方法への示唆を得ることもできると期待される。

以上で見出された居場所感の要素，対応する因子，尺度項目および引用元をまとめたものをTable1に，居場所に関する提言や論考，臨床研究における居場所感に関する記述をまとめたものをTable2に示す。

また以上で概観してきた実証的研究はすべて青年期を対象にした研究である。心理学では青年期を中心に居場所の問題が語られることが多く，実証的研究も蓄積されつつある。一方で，文部省（1992）は「居場所づくり新プラン」を打ち出した際，その対象を「すべての小・中学生」としている。このことから教育の分野では小学生を対象にした居場所づくりも数多く行われているが，実証的なデータに基づいたものではないことが懸念されている（西中，2014）。居場所の研究とは現場での問題意識から発展してきたものであり，臨床現場や学校現場に援助の手立てを還元することが最終的な目的である。そのため青年期を対象にした研究だけでなく，児童期の居場所感についても今後明らかにしていく必要があると考えられる。

Table1　居場所感の構成要素の分類

被受容感（他者からの受容）	
【受容感（家族場面）， 役割感（学校場面）】秦（2000） 独りぼっちだと感じる（＊）	【受容感（家族・学校場面）】秦（2000） 自分が皆から受け入れられていると感じる 自分が困っているときにはみんなが助けてくれる
【受容感（家族場面）】秦（2000） 自分のことを本気で叱ってくれる人がいる	【対他的疎外感】堤（2002） 自分が周囲に受け入れられない と感じること（＊） みんなの中で自分だけが無視されている と感じること（＊）
【自己疎外感】堤（2002） 自分の考えや悩みを誰にも分かって もらえないと感じること（＊） 周囲の人に冷たくされるとき自分の 居場所がないと感じること（＊） 親しい人とケンカしたとき自分の 居場所がないと感じること（＊）	【受容的環境】富永・北山（2003） 自分のことを気にかけてくれる 自分のことをわかってくれる 自分のことをあたたかく受け入れてくれる
【受容・関心 （個人要素）】田中・田嶌（2004） 自分のことを気にかけてくれる人がいる 自分のことをあたたかく 受け入れてくれる人がいる まわりの人から関心をもたれている	【共感・連帯感 （個人要素）】田中・田嶌（2004） 仲間だと感じる人がいる
【被信頼・受容感】大久保（2005） 周りから関心をもたれている 存在を気にかけられている	【劣等感のなさ】大久保（2005） 嫌われていると感じる（＊）
【居場所感（高校生・学校，家庭，地域）】 【価値観の共有 （大学生・学校，地域）】斎藤（2007） 自分のことをわかってくれる人がいる	【被受容感】杉本・庄司（2006a） 自分を本当に理解してくれる人がいる 悩みを聞いてくれる人がいる ひとりじゃない 自分はそこのメンバーである 自分は大切にされている
【居場所感（高校生・学校，家庭，地域）】 【価値観の共有 （大学生・学校，家庭，地域）】斎藤（2007） 自分のことを気にかけてくれる人がいる	【居場所感（高校生・学校，地域）】 【肯定的心理状態 （大学生・家庭）】斎藤（2007） 自分のことをあたたかく受け入れてくれる人がいる
【被受容感】則定（2008） ○○に無条件に愛されている ○○は，私を大切にしてくれる ○○に無条件に愛されている 無条件に受け入れられている ○○と一緒にいると， ここにいていいのだと感じる	【自己有用感】石本（2010） 関心をもたれている

Table1　居場所感の構成要素の分類　つづき

緊張からの解放（安心感）	
【リラックス】松田（1997） リラックスする場所 安らぐ場所 くつろぐ場所 居心地のよい場所 安心する場所 落ち着ける場所 リラックスできない場所（＊） 心身ともに休まる場所 落ち着かない場所（＊） 気をつかわない場所 癒される場所	【プライベート】松田（1997） 逃げ込む場所 【受容感（家族場面）】秦（2000） 家族で食事をするとくつろいだ気分になる 【受容感（学校場面）】秦（2000） 休み時間になるとくつろいだ気持ちになる 【受容感（家族・学校場面）】秦（2000） 安らいだ気持ちになる
【安堵感】田中（2002） のんびりした ゆっくりした ゆったりした くつろいだ 落ち着いた おだやかな ほっとした のんきな 安心した 緩んだ いごこちのよい のびのびした	【対他的疎外感】堤（2002） 慣れない場所にいて居心地が 悪いと感じること（＊） 人といてストレスを感じること（＊） 一人でいるとき自分の居場所が ないと感じること（＊） 【自己疎外感】堤（2002） 一人でいてさびしいと感じること（＊） 自分のプライバシーが守られて いないと感じること（＊）
【居場所感】田中・田嶌（2004） おちつく ほっとする 楽である いごこちがいい 安心する リラックスする のんびりする くつろぐ	【安心感】富永・北山（2003） ほっとする くつろげる 【居心地の良さの感覚】大久保（2005） リラックスできる 安心する 【精神的安定】杉本・庄司（2006a） 安心する
【居場所感（高校生・学校，地域）】 【肯定的心理状態 （大学生・学校，家庭，地域）】斎藤（2007） ほっとする くつろげる	【安心感】則定（2008） ○○と一緒にいると，ホッとする ○○と一緒にいると，安心する ○○と一緒にいると，居心地がいい ○○と一緒にいると，くつろげる

（＊）は逆転項目

3．児童期および青年期における居場所感研究の課題

1）青年期における居場所感の適応的効果に関する実証的研究

居場所研究の実証的研究では，前節で概観した居場所の構成条件に関する研究の他に，居場所や居場所感と，アイデンティティや攻撃性といった心理的状態や特性，メンタルヘルスとの関連について検討した研究がみられる（石本，2010b；則定，2008；杉本・庄司，2006b，2006c，2006d；杉本，2010；田島，2000；堤，2002；高橋・米川，2008など）。これらの研究は，居場所感あるいは居場所の適応的な効果について実証的に検討したものであるといえる。本節ではそれらを概観することにより，居場所感を研究する上での今後の課題について明らかにする。

居場所感とメンタルヘルスの関連を検討したものとして田島（2000）は，青年期を対象に「居場所がある」と感じている人と「居場所がない」と感じている人の差異について検討し，「居場所がない」感覚が抑うつと関連すること，友人関係の良好さが「居場所がある」感覚と関連していること，および家族を居場所と認知していることが自分に対する満足感と関連することを明らかにした。則定（2008）も，思春期を対象に心理的居場所感（ここでは母親，父親，親友に対する「安心・被受容感」を心理的居場所感としている）と抑うつ傾向の関連を検討し，母親と父親のどちらにも「安心・被受容」を抱いているほど抑うつ傾向が低いこと，および両親のどちらにも「安心・被受容感」を感じられていなければ親友に対して「安心・被受容感」を抱いていても，抑うつ傾向が軽減されないことを明らかにした。さらに石本（2010c）は青年期を対象に，居場所感（ここでは家族，友人，クラス，恋人に対する「自己有用感」と「本来感」を居場所感としている）と自己肯定意識および学校適応との関連を検討し，居場所感が自己肯定意識や学校適応に与える影響を明らかにしている。居場所感を扱った研究ではないが，杉本・庄司（2006b）は「自分ひとりの居場所」，「家族のいる居場所」，「友だちのいる居場所」から居場所を分類する「居場所環境」という視点を提案している。その上で大学生を対象に，中学生の頃の居場所環境および現在の居場所環境と，現在の精神的健康の関連について調査し分析を行った。分析の結果，中学生の頃に「家族のいる居場所」を含んだ居場所

Table1　居場所感の構成要素の分類　つづき

本来感	自由の確保	自己存在感（自己肯定感）
【リラックス】松田（1997） 自分らしくいれない場所（＊） 自分らしくいれる場所 ありたい自分になれる場所	【リラックス】松田（1997） 自由な場所 好きな事ができない場所（＊） 好きな事ができる場所	【リラックス】松田（1997） 自分が必要とされていない場所（＊？）
【安心感（家族・学校場面）】秦（2000） 自分のありのままの気持ちがいえる 自分らしくいられる	【プライベート】松田（1997） 干渉されない場所	【ハッスル】松田（1997） 自分の存在意義を感じる場所 自分が必要とされる場所 自分を認めてくれる
【自己疎外感】堤（2002） 自分らしさが出せないと感じること（＊）	【安心感（家族・学校場面）】秦（2000） 自分のやりたいことができる 余計な気を使う必要がない	【役割感（家族・学校場面）】（秦，2000） みんなから必要とされていると感じる 自分の存在が認められていると感じる
【安心感】富永・北山（2003） ありのままの自分でいられる	【自己疎外感】堤（2002） 自分の思いどおりにできないと 感じること（＊）	【安心感（家族場面）， 役割感（学校場面）】秦（2000） ありのままの自分が認められていると感じる
【評価のなさ・自然な自分 （個人要素）】田中・田嶌（2004） 自分をごまかす必要がない	【評価のなさ・自然な自分 （個人要素）】田中・田嶌（2004） まわりを気にしなくてよい まわりの人からうるさく言われなくてすむ	【対他的疎外感】堤（2002） 自分が周りの人に必要とされていないと 感じること（＊） あまり知らない人の中に一人でいると 感じること（＊）
【居心地の良さの感覚】大久保（2005） 自由に話せる雰囲気である ありのままの自分を出せている	【劣等感のなさ】大久保（2005） 周りから指示や命令をされている ように感じる（＊）	【役割】富永・北山（2003） 自分が必要とされている
【精神的安定】杉本・庄司（2006a） 無理をしないでいられる 本当の自分でいられる 素直になれる	【精神的安定】杉本・庄司（2006a） 誰にもじゃまされない	【被信頼・受容感】大久保（2005） 周りから必要とされていると感じる
【居場所感（高校生・学校，地域）】 【肯定的心理状態 （大学生・学校，地域）】斎藤（2007） ありのままの自分でいられる	【行動の自由】杉本・庄司（2006a） 自分の好きなことができる 自分の好きなようにできる 自由だ自分だけの時間がもてる	【居場所感（高校生・学校，家庭，地域）】 【肯定的心理状態 （大学生・学校）】斎藤（2007） 自分が必要とされている感じがする
【本来感】則定（2008） ○○と一緒にいると， ありのままの自分を表現できる ○○と一緒にいると， ありのままの自分でいいのだと感じる ○○と一緒にいると，自分らしくいられる ○○と一緒にいると， 心から泣いたり笑ったりできる	【他者からの自由】杉本・庄司（2006a） 他人のペースに合わせなくていい 人を気にしなくていい	【役割感】則定（2008） ○○と一緒にいると自分のことを， かけがえのない人間なのだと感じる
【本来感】石本（2010） これが自分だ，と実感できるものがある いつでも自分らしくいられる いつも自分を見失わないでいられる ありのままの自分が出せる いつでも自分らしくいられるゆるがない 「自分」をもっている	【居場所感（高校生・学校，地域）】 【肯定的心理状態 （大学生・学校，地域）】斎藤（2007） のびのびと好きなことができる 【本来感】石本（2010） 自分のやりたいことをすることができる	【被受容感】則定（2008） ○○に必要とされている 【自己有用感】石本（2010） 私がいないと○○がさびしがる 自分の存在が認められていると感じる 自分が必要とされていると感じる

（＊）は逆転項目

をもっており，現在「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ居場所をもっていることが，精神的健康と関連していることが明らかにされている。さらに杉本（2010）は中学生の「居場所環境」と精神的健康についても検討し，ここでも「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」が精神的健康と関連しており，特に「家族のいる居場所」が強く関連していることを明らかにしている。加えて杉本・庄司（2006c）は中学生の「居場所環境」と学校適応の関連を分析し，「友だちのいる居場所」や「家族のいる居場所」の学校適応への影響を明らかにしている。

他方，居場所とアイデンティティの関連を検討した堤（2002）は，青年の「居場所がない」感覚とアイデンティティ混乱状態との関連について明らかにした。また小沢（2002），（2003）は実証的研究ではないが，アイデンティティを実存的視点から明らかにするために，「居場所」という言葉を用いて考察している。ここではErikson（1959/1973）のいう「niche（適所）」を「居場所」と捉え，居場所を得ることによってアイデンティティの感覚をもつことができると論じられている。高橋・米川（2008）はこの小沢の理論を基に，居場所感とアイデンティティの関連について調査し，居場所がない状態がアイデンティティの確立度合いが低い状態を示している可能性について言及している。さらに杉本・庄司（2006d）は，大学生の居場所環境と自我同一性の関連について明らかにしている。ここでは，中学生の頃に感じていた「居場所がない」感覚が，大学生の現在の「居場所のなさ」よりもアイデンティティの混乱度合いに影響するとしており，「居場所のなさ」が

Table1　居場所感の構成要素の分類　つづき

自己有用感	充実感（達成感）	高揚感
【役割感（家族・学校場面）】 秦（2000） 私がいないとみんなが困る 私にしかできない役割がある 自分が役に立っていると感じる 【役割】富永・北山（2003） 自分の役割がある， 自分の立場からできることがある 自分のすることや働きを認めてくれる， 評価してくれる 【受容・関心（個人要素）】 田中・田嶌（2004） 自分のすることをみとめてくれる ひとがいる まわりの人から期待されている 【被信頼・受容感】大久保（2005） 周りから頼られていると感じる 周りから期待されている 良い評価がされていると感じる 【劣等感のなさ】大久保（2005） 役に立っていないと感じる（＊） 周りに迷惑をかけていると 感じる（＊） 【被受容感】杉本・庄司（2006a） 人のために何かができる 【居場所感（高校生・学校，家庭，地域）】 【肯定的心理状態（大学生・学校，家庭， 地域）】斎藤（2007） 自分の役割がはっきりしている と思われる 【役割感】則定（2008） ○○の役に立っている ○○の支えになっている ○○から頼りにされている ○○に対して， 自分にしかできない役割がある ○○のためにできることがある 【自己有用感】石本（2010） 自分が役に立っていると感じる 自分に役割がある 私がいないと○○が困る	【ハッスル】松田（1997） やる気がでてくる場所 自分の能力が発揮できる場所 【充実感】田中（2002） やる気に満ちた 【対他的疎外感】堤（2002） グループの中にいて自分が何か しなければならないのに何をして いいかわからないと感じること（＊） 周囲が何かやっているときに自分は 何もすることがないと感じる こと（＊） 【充実感（個人要素）】 田中・田嶌（2004） がんばってとりくめるものがある 熱中できるものがある 【課題・目的の存在】大久保（2005） 充実している 熱中できるものがある 【劣等感のなさ】大久保（2005） 自分だけだめだと感じる（＊） 【自己肯定感】杉本・庄司（2006） 何かに夢中になれる 自分の能力を発揮できる 自分はうまくやれる 自分に自信がもてる 【居場所感（高校生・学校，家庭，地域）】 【肯定的心理状態（大学生・学校，地域）】 斎藤（2007） 自分がいきいきできる やりがいや満足感を感じる	【ハッスル】松田（1997） 楽しい場所 【受容感（家族・学校場面）】 秦（2000） 幸せな気分になる 【充実感】田中（2002） 元気いっぱいの いきいきした うきうきした 楽しい おもしろい すてきな さわやかな 【自己疎外感】堤（2002） 落ち込んで精神的につらい と感じること（＊） 【明るさ（場所要素）】 田中・田嶌（2004） にぎやかな感じがする 明るい感じがする 【居心地の良さの感覚】 大久保（2005） 幸せである 【精神的安定】 杉本・庄司（2006a） 幸せ おもしろい 楽しい 【居場所感（高校生・家庭，地域）】 【肯定的心理状態（大学生・学校，地域）】 斎藤（2007） 楽しい

（＊）は逆転項目

個人に与える影響が長期的である可能性について指摘している。このように居場所感とアイデンティティの関連についても多くの研究において指摘されている。他にも中学生の居場所感と学校適応の関連について検討したもの（田中・田嶌，2004），大学生の居場所感とアパシー傾向について検討したもの（石本・倉澤，2009），大学生の居場所感と無気力感の関連について検討したもの（田代・中村・堀内，2011）や，大学生の過剰適応と居場所感の関連について検討したもの（後藤・伊田，2013），青年の居場所感が攻撃性に与える影響について検討したもの（松木，2013）など，居場所感と心理的状態や特性，メンタルヘルスとの関連に関する研究は蓄積されつつあり，その結果，居場所感の適応的な効果については一定の理解が得られつつあることがうかがえる。

これらでは居場所感を，前節で論じた①の方法である，対人関係の視点から教示しているものがほとんどである。そのため家族関係や友人関係が良好であることが，居場所感を感じていることとほぼ同義と捉えられており，それが心理的適応や学校適応につながると結論づけられている。どのような対人関係に居場所感を感じていることが適応的であるのかを明らかにすることは，たしかに「居場所がない」感覚をもつ人への援助を考える上で必要な知見であると考えられるし，これらが実証的に明らかにされたことは大きな進歩であろう。一方で居場所の研究とは「居場所がない」人に居場所を提供するためのものであり，臨床現場や学校現場に援助の手立てを還元することが最終的な目的である。これまでの研究成果より，家族関係や友人関係を調整するように援助す

Table1　居場所感の構成要素の分類　つづき

連帯感	場との一致感
【対他的疎外感】堤（2002） 周囲の人の意見や考えに自分が 共感できないと感じること（＊） 【連帯感】富永・北山（2003） 価値観を共有できる 協力して何かに取り組むことができる 連帯感を感じる 【受容・関心（個人要素）】田中・田嶌（2004） 考え方をまわりの人とわかり合える 【共感・連帯感（個人要素）】田中・田嶌（2004） 同じ感じ方をする人がまわりにいる 周りの人と協力して何かにとりくむことができる 【居心地の良さの感覚】大久保（2005） 周りに共感できる 周りと助け合っている 【居場所感（高校生・学校，家庭，地域）】 【肯定的心理状態 （大学生・学校，家庭，地域）】斎藤（2007） 協力して何かにとりくむことができる 気持ちが通じ合っている人がいる 【居場所感（高校生・学校，家庭，地域）】 【価値観の共有 （大学生・学校，家庭，地域）】斎藤（2007） 同じ考え方，価値観をもっている人がいる	【対他的疎外感】堤（2002） 自分が周りの人の輪に入れ ないと感じること（＊） 周りが親しそうにしている中で自分 だけ孤立していると感じること（＊） 【自己疎外感】堤（2002） 自分がなぜそこにいるかわからず 戸惑っていると感じること（＊） 【評価のなさ・自然な自分 （個人要素）】田中・田嶌（2004） 自分ひとりがめだたなくてすむ 【非孤立感（個人要素）】田中・田嶌（2004） ひとりだけとり残された感じがする（＊） 自分だけ浮いていると感じる（＊） 【居心地の良さの感覚】大久保（2005） 周囲に溶け込めている 周囲となじめている 周りの人と楽しい時間を共有している 自分と周りがかみ合っている 【劣等感のなさ】大久保（2005） 自分が場違いだと感じる（＊）

（＊）は逆転項目

Table1　居場所感の構成要素の分類　つづき

内省	成長感
【プライベート】松田（1997） 自分を振り返る場所 考える場所 【自己疎外感】堤（2002） 自分で自分を見つめることが できないと感じること（＊） 【思考・内省】 杉本・庄司（2006a） 自分のことについてよく考える 物思いにふける 1日のことを振り返る ボーっと考えこむことがある	【対他的疎外感】堤（2002） 自分にとって得るものがない と感じること 【課題・目的の存在】 大久保（2005） 将来役に立つことが学べる これからの自分のためになる ことができる やるべき目的がある

（＊）は逆転項目

ることが居場所感を高めることに繋がると推定されるが，具体的にどのような援助方法が効果的なのかについては実証的に明らかにされていない。居場所感の促進をターゲットとした居場所づくりの実践研究も行われつつあるが，実証性に乏しい点が課題である（西中，2014）。そこで具体的な援助の方法を考えるために，「居場所がない」感覚の実態および「居場所がない」感覚が引き起こされる背景について検討する必要があると考える。「居場所がない」感覚（以下，居場所欠乏感とする）が引き起こす不適応状態にも，様々なものがあると考えられる。例えば居場所欠乏感から存在意義に関わるような重大な不適応状態に陥り，臨床的な介入が必要な場合もあれば，なんとなく生きづらさや，対人関係に対する欲求不満を感じ，ひっそりと居場所欠乏感を抱いている状態も想像される。特に青年期に比較的一般的とされる「居場所がない」感覚（堤，2002）とは，後者のようなものが少なくないと予想される。つまり同じように「居場所がない」という言葉で表される状態にあっても，その実態は様々であることが予測され，同時に必要とする援助や希求する居場所感も異なると考えられる。

以上のことから，居場所欠乏感の実態や居場所欠乏感が喚起される背景について調査・分析すること，さらにどのような状態にある者がどのような居場所感を希求しているのかについて明らかにすることが，今後の課題として挙げられる。なおここで概観した研究も，そのほとんどが思春期・青年期に関するものであった。前節でも論じたとおり，教育の分野では居場所の問題は小・中学生を中心になされている。よって青年期において蓄積された研究

Table2　論考及び臨床研究における定義の分類

被受容感（他者からの受容）	緊張からの解放（安心感）
沖田（1997） 子ども一人ひとりの個性が大切にされ 【永続的居場所】藤竹（2000） この場所こそは自分をまるごと受け入れてくれると自信をもって言うことのできる 廣井（2000） 受け入れられていると感じられること 【公的居場所】中島（2003） 自分を確認し，自由に自分を表現でき，安心して人や社会との関係性をもてる場所 中原（2003） 自分がそこにいても良い場であり 【社会的居場所】中島・倉田（2004） 人と関わりをもち自分を確認できる場所 廣木（2005） 子どもにとって自分の気持ちを理解してくれる人と必ず出会えるところ 廣木（2005） 自分の意見が尊重され	文部省（1992） 精神的に安心していることのできる場所 沖田（1997） 子どもが精神的に安心できる場所 【人間的居場所】藤竹（2000） 安らぎを覚えたり，ほっとすることができ 村瀬ら（2000） 安心していられる 【後ろ向きな居場所】 安齋（2003） 居られない場から逃げ出し立ち止まって心の安定を図る場 【私的居場所】中島（2003） 精神的な疲れを回復し，自分を取り戻す，逃避・回復の場所 【個人的居場所】 中島・倉田（2004） 一人になって自分を取り戻せる場所

Table2　論考及び臨床研究における定義の分類　つづき

本来感	自己存在感（自己肯定感）
【人間的居場所】藤竹（2000） 人間が自分自身であることを実感できる 村瀬ら（2000） ありのままの自分で 廣井（2000） 自分自身でいることが 中原（2003） 自分らしくいられる場であり，自分がありのままにそこにいてもいいと認知し得る感覚 廣木（2005） 自分の気持ちを素直に表現してもそれが否定されないところ	文部省（1992） 存在感を実感することができ 沖田（1997） 自己存在感が得られるような 【社会に開かれた居場所】 三本松（2000） その人がそこに居ることを必要とされたり 廣木（2005） 自己肯定感が取り戻せるところ

Table2　論考及び臨床研究における定義の分類　つづき

内省	自由の確保
【前向きな居場所】安齋（2003） 自分の自己像を修正し自立していく場	【私的居場所】中島（2003） 他人からの監視・干渉を避け

Table2　論考及び臨床研究における定義の分類　つづき

自己有用感	充実感（達成感）
【社会的居場所】藤竹（2000） 自分（の資質や能力）が他人によって必要とされている場所 【社会的居場所】藤竹（2000） 集団における自分のポジションを明確にできる 【社会に開かれた居場所】 三本松（2000） 認められ社会的な認知を受けている 廣木（2005） 自分の役割が実感できるために	沖田（1997） 自分の能力が十分発揮でき 【社会的居場所】藤竹（2000） 自分の資質や能力を社会的に発揮することができる 【社会に開かれた居場所】 三本松（2000） 自分の力を発揮し 【前向きな居場所】安齋（2003） いきいきと自己発揮することが予測されている

成果をもとに，小学生の心理的適応や学校適応に関連する要因についても居場所感の見地から明らかにする必要があると考えられる。

2）児童期における適応の規定要因に関する仮説

上述の通り思春期・青年期における居場所感の適応的な効果については，これまでに明らかにされてきたが，児童期に関しては未だ明らかにされていない。そこでここでは，児童期における心理的適応や学校適応に影響を与えると考えられる要因について，青年期の居場所感との関連から考察する。

適応感の規定要因に関する研究

前節で論じたとおり，大久保（2005a）は適応感を「個人が環境と適合していると意識していること」であると定義しており，学校という青年に共通する環境を対象に調査を行っている。ここではこれまでの学校適応に関する研究における問題点を的確に指摘した上で新たな適応感尺度を作成し，学校という環境における適応感を規定する要因について明らかにしている。その結果，「友人との関係」が学校適応感に強く影響を与えていること，および学校の特徴（いわゆる「進学校」や「困難校」など）により，「教師との関係」「学業」と学校適応感との関連が異なることが明らかにされている。また岡田（2008）は中学生の学校適応感を順応と享受の 2 側面から捉え，順応には友人への意識が，享受には教師や校則への意識が関連していることを明らかにしている。さらに石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・森口，（2009）は友人関係を心理的距離と同調性の 2 軸から捉え，青年期の学校適応および心理的適応との関連を明らかにしている。ここでは高校生において，密着した友人関係が学校適応には適応的に影響するものの，心理的適応には不適応的に関連する可能性が示されている。このように青年期における適応感研究では，友人関係の認知がその規定要因として見出されている。

一方小学生の学級適応感の規定要因について検討した江村・大久保（2012）は，青年期における学校適応感の規定要因が「友人関係」であること（大久保，2005b）に対し，小学生の学級適応感の規定要因が「教師との関係」であることを明らかにしている。このように教師との関係が児童の適応感へ影響を与える可能性を

示唆している研究として，教師の児童認知が児童同士の友人関係に与える影響について検討した笠松・越（2007），教師の管理意識と児童の学級適応感の関連について検討した河村・國分（1996）がみられる。他方，児童の心理的適応を扱った研究では，母親や友人に対する対人関係に関心をもっていないことが孤独感に影響をおよぼすこと（井上・高橋，2000）が明らかにされている。以上より児童期における適応感研究においても，適応感に対人関係が関連する可能性が示唆されているが，青年期と異なる点として，友人だけではなく教師や母親との関係性が重視されていることが示されているといえる。

児童期における適応の規定要因に関する仮説

以上の知見をもとに，ここでは児童期における適応を規定する要因について仮説を提示する。先述したとおり，児童期・青年期における適応を規定する要因として，対人関係への認知や感情が共通して挙げられる。つまり発達段階に関わらず，対人関係を肯定的に認知し，ポジティブな感情をもっていることが適応につながることが予想される。一方で青年期においては良好な友人関係が適応と強く関わっているのに対し，児童期では親や教師との関係も重視されている点が異なる。これに加え，小学生を主な対象に含んで議論している，教育分野の居場所の論考では，「自分の力を発揮できる」というようなコンピテンスに関わる感覚が見出されていることを参考に，本研究では，Erikson の漸成発達理論における第Ⅳ段階「勤勉性（industry）」の観点から小学生の適応を検討する。Erikson（1959/1973）は児童が学びや遊びの中で，新たな技能を獲得すべく努力することに関わる心理社会的危機として「勤勉性（industry）」を見出しているが，これには小学校という児童が初めて出会う学校環境，換言すると教師という対人関係が，強く影響を与えていることが推定される。Erikson（1968/1982）はすべての子どもは何らかの才能・能力をもっており，その「自分には能力があるのだ」という感情を支持してやる必要があると論じている。三好（2011）は「有能感（competence）」の生成とその後のアイデンティティに基づいた「生産性（industry）[5)]」について，谷崎潤一郎と芥川龍之介の伝記研究を通し，「大人が教育やしつけと称して子どもたちを思い通りに育てようとした場合，子どもたちは活力の生成を阻害され，どんな才能・能力に恵まれても自分の才能・能力が何に適しているのかを見出すことができなくなる」と指摘している。このようなことから，他者からの支持，特に親や教師からほめられることが関わっていると予想される「勤勉性（industry）」の獲得が，児童期の適応に関連していると仮定される。他方，青年期の適応研究や居場所研究においては，友人関係の良好さが適応につながることが示されている。そこで児童期・青年期の適応を規定する要因について，友人関係および「勤勉性（industry）」の観点から，発達段階における差異を検討する必要があると考えられる。

4．まとめと今後の展望

本研究では居場所に関する先行研究を概観し，居場所感の見地から考察を行ってきた。本節では以上で論じた内容を総括し，今後の課題について言及する。

「居場所」という言葉には「場所」という文字が含まれることから，家や部屋といった物理的な場所が連想されることが多く，先行研究においてもその傾向が示されていた（白井，1998など）。しかし「居場所がない」という文脈が，家や部屋がないことを表しているのではないことからも，居場所として想起される物理的な場所の欠乏が，「居場所がない」という状態ではないことは明らかであり，居場所概念における居場所とは物理的な場所ではないと推定される。つまり居場所の実態を捉えるためには居場所はどこか，居場所とはなにかを議論するのではなく，「居場所がある」，「居場所がない」という文脈で居場所を捉え，それらについて研究する必要があると考えられる。そこで本研究では，個人が「居場所がある」という感覚を規定する感情である「居場所感」を感じられる，物理的空間や対人関係，時間や状況を含む「場」を居場所と捉えた。

上述のような視座に立ち，居場所に関する論考を概観した。その結果，これまで示されてきた通り，居場所はいくつかの種類に分類できることが推定され，分類の視点として「個人が重視する居場所感の要素」が見出された。そこで第 1 の課題として，「個人が重視する居場所感の要素」により居場所を分類し，それぞれの効果について実証的に明らかにすることが挙げられた。

さらに居場所の実証的研究における問題点を明らかにすることを通し，居場所感を捉えるアプローチ方法について考察した。その結果第 2 の課題として，以下の 2 つのアプローチ方法による新たな居場所感の構成条件に関する研究が必要であると考えられた。

①居場所を「居場所がない」という体験の側面から操作的に定義し，捉えるアプローチ方法
②居場所感の要素を不足なく含む項目によって居場所を捉えるアプローチ方法

まず居場所感の実態を明らかにする際，どのように居場所を捉え教示するのかという点が先行研究の課題として見出された。「居場所」は「居場所がある」状況では意識されず，「居場所がない」という状況に陥って初めて意識されるものであるという特殊な性質が指摘されている（萩原，1997など）ことから，居場所感を想起してもらう際，「居場所がない」という体験と切り離しては捉えられないことが予想された。よって居場所を「居場所がない」という体験の側面から操作的に定義し，居場所感の実態について明らかにする必要があると考えられた。

他方，居場所の定義や教示方法は未だ様々であるが，居場所感の要素として共通のものがみられることも明らかになった。そこで，②居場所感を現在どの程度感じているのかという視点から「居場所がある」状態を捉えるアプローチが必要であると考えられた。そのために，居場所感の要素を網羅する項目を準備し，それらの感覚をどのぐらい感じているのかという教示による調査の基，居場所感を包括的に測定する必要があると考えられた。また本研究で取上げた，尺度を用いた実証的研究は，すべて青年期を対象にした研究であった。文部省（1992）が居場所づくりの対象を「すべての小・中学生」としていることから，教育の分野では小学生を対象にした居場所づくりも数多く行われているが，実証性に乏

しいことが指摘されていた（西中，2014）。そのため児童期の居場所感についても今後明らかにしていく必要があると考えられた。

さらに青年期の居場所研究において，居場所の適応的な効果が実証的に明らかにされていた。しかし具体的な援助の手立てについては明らかにされていないため，それらを明らかにするために，居場所欠乏感の実態や居場所欠乏感が喚起される背景について調査・分析すること，さらにどのような状態にある者がどのような居場所感を希求しているのかについて明らかにすることが，第3の課題として挙げられた。加えて居場所と適応との関連に関する研究も，そのほとんどが思春期・青年期を対象としたものであった。よって青年期において蓄積された研究成果をもとに，小学生の心理的適応や学校適応に関連する要因についても居場所感の見地から明らかにする必要があると考えられた。

上記をふまえ，小学生の心理的適応や学校適応に関連する要因について考察した。その結果，「勤勉性（industry）」の獲得が児童期の適応に関連していると仮定された。他方，青年期の適応研究や居場所研究においては，友人関係の良好さが適応につながることが示されており，特に居場所研究においては友人関係においてありのままの自分が受け入れられることが重視されているといえる。そこで児童期・青年期の適応を規定する要因について，友人関係における「本来感」および「勤勉性（industry）」の観点から，発達段階における差異を検討する研究の必要性が第4の課題として見出された。

引用文献

安齋智子（2003）.「居場所」概念の変遷　発達，**96**，33-37.

東　宏行（1999）.「居場所」づくりに内在する論理の錯綜－「居場所」という呪文に消去される「関係」（特集・子どもの生活）子どもの文化，**31**（6），40-49.

江村早紀・大久保智生（2012）. 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討　発達心理学研究，**23**（3），241-251.

Erikson,E.H.（1973）. 自我同一性（小此木啓吾，訳）. 東京：誠信書房.（Erikson,E.H.（1959）. Identity and life cycle. New York : Intenrational Universities Press.）

Erikson,E.H.（1982）. アイデンティティ（岩瀬庸理，訳）. 東京：金沢文庫.（Erikson,E.H.（1968）. Identity : Youth and crisis. New York : Norton.）

藤竹　暁.（2000）. 居場所を考える. 藤竹　暁（編），現代人の居場所（現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3），47-57. 東京：至文堂

後藤明梨・伊田勝憲（2013）. 大学生における過剰適応と居場所感の関連　釧路論集：北海道教育大学釧路分校研究報告，**45**，9-16.

萩原建次郎（1997）. 若者にとっての「居場所」の意味　日本社会教育学会紀要，33，37-44.

秦　彩子.（2000）.「心の居場所」と不登校の関連. 臨床教育心理学研究，**26**，97-106

廣井いずみ.（2000）.「居場所」という視点からの非行事例理解. 心理臨床学研究，**18**，129-138.

廣木克行.（2005）. 臨床教育（Clinical Education）―子どもの居場所をつくる―. 神戸大学発達科学部編集委員会（編），キーワード 人間と発達，106-107. 岡山：大学教育出版

井上まり子・高橋惠子（2000）. 小学生の対人関係の類型と適応：絵画愛情関係テスト（PART）による検討　教育心理学研究，**48**（1），75-84.

石本雄真（2009a）. 居場所概念の普及およびその研究と課題　神戸大学大学院人間発達環境額研究科 研究紀要，**3**（1），93-100.

石本雄真（2010a）. 居場所と友人関係の観点からとらえる青年期の学校適応 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（未公刊）. 神戸：神戸大学.

石本雄真（2010b）. こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所―精神的健康および本来感，自己有用感との関連から，カウンセリング研究，**43**（1），72-78.

石本雄真（2010c）. 青年期の居場所感が心理的適応，学校適応に与える影響，発達心理学研究，**21**（3），278-286.

石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長　然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平（2009）. 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連　発達心理学研究，**20**（2），125-133.

石本雄真・倉澤知子（2009）. 心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連，神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要，**2**（2），11-16.

笠松幹生・越　良子（2007）. 教師の児童認知の多様性が児童の級友認知と級友関係に及ぼす影響　学校心理学研究，**7**（1），21-33.

河村茂雄・國分康孝（1996）. 教師にみられる管理意識と児童の学級適応感との関係についての調査研究　カウンセリング研究，**29**（1），55-59.

北山　修（1993）. 自分と居場所. 東京：岩崎学術出版社.

松田孝志.（1997）. 現代高校生における居場所の内包的な構造 筑波大学教育研究科カウンセリング専攻修士論文抄録集，31-32.

松木太郎（2013）. 青年の心理的居場所感が攻撃行動に及ぼす影響 神戸大学発達・臨床心理学研究，**12**，13-17.

三好昭子（2011）. 有能感の生成と，その後のアイデンティティに基づいた生産性についての伝記資料による比較分析　発達心理学研究，**22**（3），286-297.

文部省.（1992）. 学校不適応対策調査研究協力者会議「登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の『心の居場所』づくりをめざして－（報告）」.

村瀬嘉代子・重松正典・平田正子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文（2000）. 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ ―通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因―　心理臨床学研究，**8**，221-232.

中原睦美.（2002）. 受診が著しく遅延した重症局所進行乳癌患者の心理社会的背景の検討. ―依存のあり方と居場所感をめぐって―. 心理臨床学研究，**20**，52-63.

中島喜代子（2003）. 中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学　**54**，125-136.

中島喜代子・倉田英理子（2004）. 家庭，学校，地域における子ど

もの居場所　三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学，**55**，65-77.
西中華子（2014）．居場所づくりの現状と課題　神戸大学発達・臨床心理学研究，**13**, 7-20
則定百合子（2008a）．青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科（未公刊）．神戸：神戸大学.
岡田有司（2008）．学校生活の下位領域に対する意識と中学校への心理的適応：順応することと享受することの違い　パーソナリティ研究，**16**（３），388-395.
沖田寛子（1997）．不登校現象と子どもの「居場所」　山口大學文學會誌，**48**，17-35.
大久保智生（2005a）．青年の学校適応への関係論的アプローチ 早稲田大学大学院人間科学研究科．東京：早稲田大学.
大久保智生（2005b）．青年の学校への適応感とその規定要因：青年用適応感尺度の作成と学校別の検討　教育心理学研究，**53**（３），307-319.
小沢一仁（2000）．自己理解・アイデンティティ・居場所　東京工芸大学工学部紀要（人文・社会編），**23**，94-106.
小沢一仁（2002）．居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み　東京工芸大学工学部紀要（人文・社会編），**25**，30-40.
小沢一仁（2003）．居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと　東京工芸大学工学部紀要（人文・社会編），**26**，64-75.
三本松政之（2000）．高齢者の居場所―新しい福祉のあり方．藤竹暁（編），現代人の居場所（現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ３），193-203. 東京：至文堂
白井利明（1998）．若者に居場所はあるのか　大学進学研究，**108**，54-59.
杉本希映（2010）．中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討　湘北紀要，**31**，49-62.
杉本希映・庄司一子（2006a）.「居場所」の心理的機能の構造とその発達的変化　教育心理学研究，**54**（３），289-299.
杉本希映・庄司一子（2006b）．大学生の「居場所環境」と精神的健康との関連：過去の「居場所環境」の認知と比較を中心に　共生教育学研究，**1**，37-47.
杉本希映・庄司一子（2006c）．中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究　学校心理学研究，**6**（１），31-39.
住田正樹．（2003）．子どもたちの「居場所」と対人的世界．住田正樹・南　博文（編），子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在，3-17. 福岡：九州大学出版会
住田正樹．（2004）．子どもの発達と子どもの居場所（特集 子どもたちの居場所づくり）　青少年問題，**51**（１），10-15.
田中順子．（2002）．思春期・青年期の「居場所」研究の現在―具体的状況・感情・心理的機能について―．上智大学臨床心理研究，**25**，193-198.
田中麻貴・田嶌誠一．（2004）中学校における居場所に関する研究．九州大学心理学研究，**5**，219-228.
田代俊介・中村菜々子・堀内ゆかり．（2011）．大学生における心理的居場所感と無気力感との関連　発達心理臨床研究（兵庫教育大学発達心理臨床研究センター 研究紀要），**17**，25-34.
田島彩子（2000）．青年期のこころの「居場所」―「居場所」感覚と抑うつ感―　日本心理臨床学会第19回大会発表論文集，258.
富永幹人・北山　修．（2003）．青年期と「居場所」．住田正樹・南博文（編），子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在，381-400. 福岡：九州大学出版会
堤　雅雄．（2002）.「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱　島根大学教育学部紀要（自分・社会科学），**36**，1-7.
山岡俊英．（2002）．大学生の居場所とセルフエスティームに関する一研究　佛教大学教育学部学会紀要，**1**，137-167.
弓削洋子・足立裕美．（2006）．小学生にとっての心理的居場所の構造－物理的空間，対人関係，感情の３次元からの分析－．鳴門教育大学学校教育研究紀要，**21**，73-78.

注

1）ここでは「個人的居場所確保度」尺度と「社会的居場所確保度」尺度を用いて，それぞれの居場所をもっているか否かを測定している。それらの項目では例えば，「こころの居場所となるような１人で過ごす時間がある」といったように，その場を「こころの居場所」と認知しているかどうかを直接尋ねている。調査対象者によって「こころの居場所」，または居場所で得られる感覚をどのように認知しているのかはそれぞれ異なると考えられる。このようなことも結果に影響を与えている可能性が考えられる。

2）大久保（2005）において作成された尺度は適応感尺度であるが，尺度作成の予備調査における教示で「『居場所がある』と感じるときはどんなときですか」と尋ねているため，本研究では考察の対象に含めた。

3）富永・北山（2003）では家庭場面においてのみ，「受容的環境」と「安心感」の２因子構造を仮定している。

4）居場所となるために必要となる感情は，ここでは教示における「自分が自分らしくいることができるなあ」という感覚であると推定される。

5）ここでは「industry」の訳語として「生産性」を用いている。「industry」の訳語には「勤勉性」「生産性」が用いられることが多いが，適切な訳語がないとして，そのまま「industry」と用いているものもみられる。